



青年期における両親の養育態度の認知とフラストレーション反応との関連：
その2. 女子青年の超自我因子と反応転移について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 藤森, 立男, 藤森, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004083

青年期における両親の養育態度の認知と フラストレーション反応との関連

— その2. 女子青年の超自我因子と反応転移について —

藤 森 立 男・藤 森 和 美

1. 目 的

子供の性格特性に影響を及ぼしている最も大きな要因のひとつは両親の養育態度であり、この両親の養育態度と子供の性格特性との関連を解明しようとする多くの試みがなされている（例えば、Kawash, et al., 1985；森下, 1981；品田, 1964；Symonds, 1939；Vinack, 1968）。しかし、両親の養育態度が子供の性格特性に影響する過程を問題とすると、両親の養育態度の変数は次の3側面に分けて、検討される必要がある。それらは、①観察された両親の養育態度、②両親自身が評定する養育態度、③子供が認知する両親の養育態度である。

最近、森下（1981）は両親の養育態度に関する第2と第3の側面を取り上げ、子供の性格特性とそれら2側面との関連の程度を比較している。その結果、両親の評定する養育態度よりも子供が認知する両親の養育態度の方が、子供の性格特性と強い関連があることを明らかにしている。また、藤森ら（1992）は女子青年が認知する両親の養育態度と対人葛藤やフラストレーション場面における反応との関連を明らかにするために、「親子関係診断テスト」と「P-F Study（青年用）日本版」を実施し、以下の結果を見出ししている。

- (1) 女子青年が認知する両親の拒否的態度や支配的態度において問題群は正常群に比べて、女子青年の「他責固執反応」や「自責逡巡反応」の高い人が有意に多く、この関連は母親と父親の養育態度においてほぼ共通していた。
- (2) また、母親の矛盾する養育態度において問題群は正常群に比べて、女子青年の「無責固執反応」の高い人が有意に多かった。

今回は、藤森ら（1992）の研究で触れることができなかったP-F反応の中で、特に両親の養育態度やしつけ、社会的な拘束によって自分自身を監視する超自我の発達の際となる超自我阻害場面の『超自我因子』と両親の養育態度との関連について検討を試みた。これに加えて、「P-F Study」の場面1から場面24に至るまでの間に、反応がどのような変動を示すかについて吟味する『反応転移値』と両親の養育態度との関連も検討した。

2. 方 法

【2.1 測定用具】

両親の養育態度の測定には、「親子関係診断テスト（児童・生徒用）」（品川・品川, 1958）の第I

部を用いた。養育態度をパーセントाइルに換算し、0-20パーセントाइルを危険地帯、21-40パーセントाइルを準危険地帯としている。超自我因子と反応転移値の測定には、「P-F Study(青年用)日本版」(林・その他、1987)を用いた。表1は、超自我因子について具体的に説明したものである。また、反応転移値については、表2に示した通りである。この値で吟味できるのは、(ア)テストに関する心構え、(イ)心の中にどんな気持ちを抱えているかといった被験者の心理構造、(ウ)再教育の効果の測定等であり、臨床診断学上非常に重要な意味があると指摘されている。

表1. 超自我因子欄

超自我因子	心理学的意味
$E\%$	E が著しく高く出る者は、人から非難、叱責、詰問を受けた際にあまり反省もせず、必要以上に反動的な行動に出る傾向がある。標準範囲内の者は、その社会に適応するために必要な好ましい程度の攻撃性ないし自己主張性のあることを示している。低すぎる者は、負わされた罪が不当である場合にも積極的に攻撃しない。
$I\%$	I が著しく高いものは、とかく自己保身的で、一応悪いと思いつつも、あれこれいいのがれ、いいわけをし、本質的には自分の失敗をなかなか認めようとしない傾向が強い。標準範囲内の者は、いいわけを好ましい程度にできる。
$E+I\%$	精神発達、社会性の発達と密接な関係をもつ。高い者は、決して人並以上に社会性が高いとはいえないが、低いのは一応自我を主張し自分を積極的に守ることができないことを示し、精神発達、社会性の発達が遅れている者に多い。
$E-E\%$	素朴な攻撃傾向を示す指標。著しく高い者は、幼稚な攻撃性を備えており、精神の発達の未熟さを示す。
$I-I\%$	自責、自己非難の強さに関係する。著しく高い者はこの気持ちが過剰で、低いものは自己反省心に乏しい。
$(M-A)+I\%$	$M-A$ は他を弁護する傾向で、 I は自己弁護する傾向である。これらを加えたもので、社会性あるいは精神発達と関係している。

表2. 反応転移分析欄

反応転移値	内容
E', I', M'	O-D欄における他責、自責、無責(すなわち E', I', M')が、テストの前半とテスト後半 ⁽¹⁾ とで如何にその出現率に変化をみせるかを吟味する。
E, I, M	E-D欄における他責、自責、無責の反応(すなわち E (E を含む)、 I (I を含む)、 M)がテストの前半とテスト後半とで如何にその出現率に変化をみせるかを吟味する。
e, i, m	N-P欄における他責、自責、無責(すなわち e, i, m)がテストの前半とテスト後半とで如何にその出現率に変化をみせるかを吟味する。
$E-A$ $I-A$ $M-A$	$E-A$ 欄の反応数($E'+E+E+e$)、 $I-A$ 欄の反応数($I'+I+I+i$)、 $M-A$ 欄の反応数($M'+M+m$)がそれぞれテストの前半とテスト後半とで如何にその出現率に変化をみせるかを吟味する。
O-D E-D N-P	O-D欄の反応数($E'+I'+M'$)、E-D欄の反応数($E+E+I+I+M$)、N-P欄の反応数($e+i+m$)がそれぞれテストの前半とテスト後半とで、如何にその出現率に変化をみせるかを吟味する。

(1) テストの前半(1-12場面)とテスト後半(13-24場面)

【2.2 調査対象・実施】

調査対象者は、函館市内にある女子短期大学と四年制大学の女子学生 173 名であり、両親とも健在な 131 名を分析対象とした。調査は、1991 年 5 月～7 月の期間に、心理学・青年心理学・社会心理学などの授業の一貫として実施された。親子関係診断テストと P-F Study の順で、2 回に分けて実施した。両テストの結果は、臨床心理士 1 名⁽¹⁾ が評点化した。なお、P-F Study については評点化した結果を「P-F Study 解析プログラム Ver 1.2」(湯田, 1990) を使用し、コンピュータ処理を行った。

【2.3 分析方法】

両親の養育態度の各型に関するパーセンタイルを算出し、0-40 パーセンタイル(危険地帯・準危険地帯)に含まれるものを問題群、41-99 パーセンタイル(正常地帯)に含まれるものを正常群とした。P-F Study の結果は、標準偏差を 1.0 と設定し、超自我因子欄の 6 指標(表 1)と、反応転移分析欄の 15 指標(表 2)の値を算出した。そして、「平均値-標準偏差」より下回っているものを Low、「平均値±標準偏差」内のものを Middle、「平均値+標準偏差」を上回っているものを High と分類した(以下、それぞれ、L, M, H と略称する)。また、反応転移値が -0.5 以上を Low, -0.5 未満から +0.5 未満を Middle, +0.5 以上を High と分類した(以下、それぞれ、L, M, H と略称する)。

3. 結果

本研究では、母親および父親の養育態度に関する女子青年の認知と P-F 反応との関連性を明らかにするために、養育態度(問題・正常群の 2 水準)×P-F 反応(Low・Middle・High の 3 水準)の 2 要因対数-線型モデル分析を実施した。表 3 から表 6-2 は、その分析結果である。以下、女子青年が認知する両親の養育態度と P-F 反応との関連を各側面ごとに検討した。

【3.1 養育態度と超自我因子】

まず、女子青年が認知する両親の養育態度と超自我因子との関連を検討した。母親の養育態度と超自我因子との関連をみると(表 3)、積極的拒否型において問題群は正常群に比べて、 $(M-A) + \underline{1}\%$ の(L)が有意に多い($p < .05$)。また、矛盾型の問題群は正常群に比べて、 $\underline{1}\%$ の(L)が有意に多く、(H)が有意に少ない($p < .05$)。不一致型の問題群も正常群に比べて、 $\underline{1}\%$ の(L)が有意に多く、(H)が有意に少ない($p < .01$)。加えて、不一致型の問題群は正常群に比べて、 $\underline{E} + \underline{1}\%$ の(H)が有意に少なかった($p < .05$)。これに対して、父親の養育態度の認知と超自我因子に関しては(表 4)、いずれも有意な関連は見られなかった。

【3.2 養育態度と反応転移分析因子】

次に、女子青年が認知する両親の養育態度と反応転移値との関連を検討した。母親の養育態度と反応転移値との関連をみると(表 5-1, 表 5-2)、消極的拒否型において問題群は正常群に比べて、 $E'(H)$ と $I(L)$ が有意に多い($p < .05$)。積極的拒否型において問題群は正常群に比べて、 $I(L)$ が有意に多い($p < .05$)。期待型において問題群は正常群に比べて、 $m(M)$ が有意に少ない($p < .05$)。溺愛型において問題群は正常群に比べて、 $m(M)$ が有意に少ない($p < .05$)。盲従

表 3. 母親の養育態度と超自我因子との関連

母親の養育態度			E%			I%			E+I%			E-E%			I-I%			(M-A)+I%		
			L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H
I. 拒否	1. 消極拒否型	問題群	0	31	6	4	27	6	1	32	4	4	26	7	1	28	8	5	30	2
		正常群	0	78	16	11	69	14	5	76	13	17	63	14	1	61	32	21	64	9
	2. 積極拒否型	問題群	0	32	5	5	30	2	1	34	2	3	27	7	0	26	11	13*(+)	21	3
		正常群	0	77	17	10	66	18	5	74	15	18	62	14	2	63	29	13*(-)	73	8
II. 支配	3. 厳格型	問題群	0	35	10	6	31	8	2	37	6	6	31	8	1	34	10	9	33	3
		正常群	0	74	12	9	65	12	4	71	11	15	58	13	1	55	30	17	61	8
	4. 期待型	問題群	0	17	5	2	16	4	0	17	5	4	16	2	1	16	5	4	17	1
		正常群	0	92	17	13	80	16	6	91	12	17	73	19	1	73	35	22	77	10
III. 保護	5. 干渉型	問題群	0	18	6	3	17	4	0	20	4	4	16	4	0	18	6	4	20	0
		正常群	0	91	16	12	79	16	6	88	13	17	73	17	2	71	34	22	74	11
	6. 不安型	問題群	0	19	5	4	15	5	0	19	5	4	16	4	0	18	6	5	18	1
		正常群	0	90	17	11	81	15	6	89	12	17	73	17	2	71	34	21	76	10
IV. 服従	7. 溺愛型	問題群	0	29	9	4	27	7	0	32	6	6	26	6	1	28	9	9	26	3
		正常群	0	80	13	11	69	13	6	76	11	15	63	15	1	61	31	17	68	8
	8. 盲従型	問題群	0	6	1	0	7	0	0	7	0	1	4	2	0	4	3	1	6	0
		正常群	0	103	21	15	89	20	6	101	17	20	85	19	2	85	37	25	88	11
V. 矛盾不一致	9. 矛盾型	問題群	0	23	8	6*(+)	25	0*(-)	1	29	1	6	20	5	1	21	9	5	24	2
		正常群	0	86	14	9*(-)	71	20*(+)	5	79	16	15	69	16	1	68	31	21	70	9
	10. 不一致型	問題群	0	42	8	9**(+)	39	2**(+)	3	45	2*(-)	8	35	7	1	31	18	13	35	2
		正常群	0	67	14	6**(+)	57	18**(+)	3	63	15*(+)	13	54	14	1	58	22	13	59	9

**p<.01, *p<.05

表 4. 父親の養育態度と超自我因子との関連

父親の養育態度			E%			I%			E+I%			E-E%			I-I%			(M-A)+I%		
			L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H
I. 拒否	1. 消極拒否型	問題群	0	25	3	3	21	4	0	26	2	2	20	6	0	20	8	6	22	0
		正常群	0	84	19	12	75	16	6	82	15	19	69	15	2	69	32	20	72	11
	2. 積極拒否型	問題群	0	18	4	4	17	1	0	20	2	1	18	3	0	15	7	7	15	0
		正常群	0	91	18	11	79	19	6	88	15	20	71	18	2	74	33	19	79	11
II. 支配	3. 厳格型	問題群	0	34	9	3	34	6	0	38	5	5	31	7	1	29	13	8	32	3
		正常群	0	75	13	12	62	14	6	70	12	13	58	14	1	60	27	18	62	8
	4. 期待型	問題群	0	8	4	2	9	1	0	10	2	1	9	2	0	9	3	3	9	0
		正常群	0	101	18	13	87	19	6	98	15	20	80	19	2	80	37	23	85	11
III. 保護	5. 干渉型	問題群	0	6	1	2	3	2	0	6	1	2	4	1	0	4	3	1	6	0
		正常群	0	103	21	13	93	18	6	102	16	19	85	20	2	85	37	25	88	11
	6. 不安型	問題群	0	8	3	2	7	2	0	9	2	2	7	2	0	9	2	1	10	0
		正常群	0	101	19	13	89	18	6	99	15	19	82	19	2	80	38	25	84	11
IV. 服従	7. 溺愛型	問題群	0	32	7	7	24	8	1	32	6	7	23	9	1	28	10	11	25	3
		正常群	0	77	15	8	72	12	5	76	11	14	66	12	1	61	30	15	69	8
	8. 盲従型	問題群	0	13	4	4	11	2	2	13	2	3	9	5	0	11	6	5	12	0
		正常群	0	96	18	11	85	18	4	95	15	18	80	16	2	78	34	21	82	11
V. 矛盾不一致	9. 矛盾型	問題群	0	17	6	3	18	2	0	20	3	3	16	4	0	15	8	7	15	1
		正常群	0	92	16	12	78	18	6	88	14	18	73	17	2	74	32	19	79	10
	10. 不一致型	問題群	0	34	7	6	31	4	1	36	4	5	30	6	1	28	12	9	28	4
		正常群	0	75	15	9	65	16	5	72	13	16	59	15	1	61	28	17	66	7

型において問題群は正常群に比べて、 m (M) が有意に少ない結果となっていた ($p < .01$)。他方、父親の養育態度と反応転移値との関連をみると (表 6-1, 表 6-2), 厳格型において問題群は正常群に比べて、 E' (H) が有意に多く ($p < .05$), I' (M) が有意に少ない ($p < .05$)。干渉型において問題群は正常群に比べて、 e (M) と i (M) が有意に少ない ($p < .05$)。不安型において問題群は正常群に比べて、 m (M) が有意に少ない ($p < .05$)。盲従型の問題群は正常群に比べて、 m (M) が有意に少ない ($p < .05$)。矛盾型の問題群は正常群に比べて、 m (M) と $M-A$ (M) が有意に少ない ($p < .05$)。不一致型の問題群は正常群に比べて、 m (M) が有意に少ない結果となっていた ($p < .05$)。

4. 考 察

女子青年が認知する両親の養育態度と P-F 反応の超自我反応との関連を検討したところ、父親の養育態度と超自我因子との間に有意な関連が見られなかったものの、母親の養育態度と超自我因子との間には有意な関連が認められた。すなわち、超自我因子において、母親の養育態度が積極的拒否型の問題群は正常群に比べて、他者や自分をほどよく弁護する能力 ($(M-A) + I\%$) が低く、社会性や精神発達の未成熟な傾向と関連していることが示された。また、母親の養育態度が不一致型、矛盾型の問題群は正常群に比べて、社会適応するためにある程度必要な言い訳 ($I\%$) をせず、自己保身の能力に欠けており、無防備な特徴を持つことが示された。これらのことから、女子青年が認知する母親の積極的拒否型や矛盾・不一致型の養育態度は、女子青年の健康な自己主張や社会性を損なうことと密接な関係にあることが明らかとなった。

次に、女子青年が認知する両親の養育態度と反応転移値との関連を検討した。その結果、両親の養育態度と反応転移値に特徴的な関連が認められた。すなわち、母親の養育態度が消極的拒否型の問題群であると、他責逡巡反応 (E') がテストの前半に比べて、テスト後半でその出現率が有意に上昇していた。また、自罰反応 (I (I を含む)) がテスト後半で出現率が有意に低下していた。なお、これと同様の結果は積極的拒否型の問題群でも見られた。これらのことは、母親の養育態度が拒否型であると、女子青年は欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応が次第に増え、とがめや非難が自分自身に向けられる自責・自己非難が減少してくることを示している。

父親の養育態度においては厳格型の問題群では、他責逡巡反応 (E') がテストの前半に比べて、テスト後半でその出現率が有意に上昇していた。このことは、父親の養育態度が厳格型であると、欲求不満を起こしたことに対する失望とそれに伴う不満を外に向ける反応が後半に増えてくることを示している。表現を変えると、不満場面に遭遇した場合に、時間が経過してくると単に不平や失望の表明に終始し、自己主張するとか、他人や自分自身に責任のほこ先を向けるとか、問題解決に向かうことができないということを意味する。

5. 要 約

本研究の目的は、女子青年が認知する両親の養育態度とフラストレーション反応のうち、超自我因子値と反応転移値との関連性を検討することであった。調査対象者は、女子短期大学と四年制大学の女子学生であり、両親とも健在な 131 名を分析対象とした。両親の養育態度の測定には、「親子

表5-1. 女子青年の認知する母親の養育態度と反応転移との関連

母親の養育態度	E'			I'			M'			E			I			M			e			i			
	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	
	2	30	5*(+)	2	34	1	0	37	0	2	29	6	7*(+)	30	0	3	34	0	0	37	0	0	34	3	
I. 拒否	問題群	7	85	2*(+)	3	88	3	2	90	2	4	82	8	4*(-)	85	5	2	86	6	0	90	4	1	82	11
	問題群	3	31	3	1	34	2	0	37	0	4	29	4	8*(+)	28	1	3	34	0	0	36	1	0	34	3
	正常群	6	84	4	4	88	2	2	90	2	2	82	10	3*(-)	87	4	2	86	6	0	91	3	1	82	11
II. 支配	問題群	3	39	3	3	41	1	0	45	0	3	37	5	4	41	0	1	43	1	0	44	1	1	38	6
	正常群	6	76	4	2	81	3	2	82	2	3	74	9	7	74	5	4	77	5	0	83	3	0	78	8
	問題群	2	20	0	1	20	1	0	22	0	1	18	3	2	20	0	1	20	1	0	20	2	0	18	4
	正常群	7	95	7	4	102	3	2	105	2	5	93	11	9	95	5	4	100	5	0	107	2	1	98	10
III. 保護	問題群	0	23	1	1	22	1	0	23	1	1	22	1	1	23	0	1	21	2	0	23	1	0	19	5
	正常群	9	92	6	4	100	3	2	104	1	5	89	13	10	92	5	4	99	4	0	104	3	1	97	9
	問題群	1	21	2	2	21	1	0	24	0	1	22	1	1	23	0	1	21	2	0	23	1	0	19	5
	正常群	8	94	5	3	101	3	2	103	2	5	89	13	10	92	5	4	99	4	0	104	3	1	97	9
IV. 服従	問題群	3	34	1	1	35	2	1	36	1	2	32	4	2	35	1	2	35	1	0	37	1	1	31	6
	正常群	6	81	6	4	87	2	1	91	1	4	79	10	9	80	4	3	85	5	0	90	3	0	85	8
	問題群	0	7	0	0	7	0	0	7	0	0	7	0	0	7	0	0	6	1	0	7	0	0	5	2
	正常群	9	108	7	5	115	4	2	120	2	6	104	14	11	108	5	5	114	5	0	120	4	1	111	12
V. 矛盾不一致	問題群	3	25	3	2	28	1	1	30	0	2	26	3	6	24	1	2	27	2	0	30	1	0	26	5
	正常群	6	90	4	3	94	3	1	97	2	4	85	11	5	91	4	3	93	4	0	97	3	1	90	9
	問題群	3	44	3	2	46	2	1	49	0	3	41	6	7	42	1	3	44	3	0	49	1	0	45	5
	正常群	6	71	4	3	76	2	1	78	2	3	70	8	4	73	4	2	76	3	0	78	3	1	71	9

*p<.05

表6-1. 女子青年の認知する父親の養育態度と反応転移との関連

父親の養育態度	E'		I'		M'		E		I		M		e		i										
	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H	L	H									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16									
I. 拒否	問題群	24	3	1	27	0	1	27	0	2	23	3	3	24	1	3	23	2	0	27	1	0	25	3	
	正常群	8	91	4	4	95	4	1	100	2	4	88	11	8	91	4	2	97	4	0	100	3	1	91	11
II. 支配	問題群	0	20	2	1	19	2	0	22	0	3	17	2	3	18	1	2	18	2	0	21	1	0	18	4
	正常群	9	95	5	4	103	2	2	105	2	3	94	12	8	97	4	3	102	4	0	106	3	1	98	10
III. 保護	問題群	0	39	4*(+)	4	37*(-)	2	1	41	1	3	35	5	4	38	1	1	40	2	0	42	1	0	37	6
	正常群	9	76	3*(-)	1	85*(+)	2	1	86	1	3	76	9	7	77	4	4	80	4	0	85	3	1	79	8
IV. 服従	問題群	0	11	1	1	10	1	0	12	0	1	10	1	0	12	0	1	10	1	0	11	1	0	9	3
	正常群	9	104	6	4	112	3	2	115	2	5	101	13	11	103	5	4	110	5	0	116	3	1	107	11
V. 矛盾	問題群	0	7	0	0	6	1	0	7	0	1	6	0	0	7	0	1	5	1	0	6*(-)	1	0	4*(-)	3
	正常群	9	108	7	5	116	3	2	120	2	5	105	14	11	108	5	4	115	5	0	121*(+)	3	1	112*(+)	11
VI. 不一致	問題群	1	9	1	1	9	1	0	11	0	1	10	0	0	11	0	0	10	1	0	11	0	0	7	4
	正常群	8	106	6	4	113	3	2	116	2	5	101	14	11	104	5	5	110	5	0	116	4	1	109	10
VII. 不一致	問題群	1	36	2	1	36	2	0	38	1	3	34	3	4	33	2	2	34	3	0	38	1	1	33	5
	正常群	8	79	5	4	86	2	2	89	1	3	78	11	7	82	3	3	86	3	0	89	3	0	83	9
VIII. 不一致	問題群	1	15	1	1	15	1	0	17	0	2	14	1	1	15	1	0	16	1	0	16	1	0	15	2
	正常群	8	100	6	4	107	3	2	110	2	4	97	13	10	100	4	5	104	5	0	111	3	1	101	12
IX. 不一致	問題群	0	21	2	2	21	0	1	22	0	2	17	4	1	21	1	2	19	2	0	22	1	0	20	3
	正常群	9	94	5	3	101	4	1	105	2	4	94	10	10	94	4	3	101	4	0	105	3	1	96	11
X. 不一致	問題群	2	36	3	2	38	1	1	40	0	2	32	7	6	34	1	3	36	2	0	41	0	0	36	5
	正常群	7	79	4	3	84	3	1	87	2	4	79	7	5	81	4	2	84	4	0	86	4	1	80	9

*p<.05

表6-2. 女子青年の認知する父親の養育態度と反応転移との関連

父親の養育態度	m						E-A						I-A						M-A						O-D						E-D						N-P					
	L		M		H		L		M		H		L		M		H		L		M		H		L		M		H		L		M		H							
	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H	L	M	H									
I. 拒否	問題群	0	27	1	0	27	1	0	28	0	0	28	0	2	25	1	1	27	0	0	28	0	0	28	0	0	0	0	20	8												
	正常群	2	99	2	0	99	4	0	103	0	1	101	1	5	98	0	1	98	0	1	102	0	1	102	0	0	0	87	16													
2. 積極拒否型	問題群	1	20	1	0	22	0	0	22	0	1	20	1	1	21	0	0	21	0	0	22	0	0	22	0	0	0	15	7													
	正常群	1	106	2	0	104	5	0	109	0	2	106	1	5	104	0	1	104	0	1	108	0	1	108	0	0	92	17														
III. 支配	問題群	2	39	2	0	41	2	0	43	0	1	42	0	2	41	0	2	41	0	0	43	0	0	43	0	0	32	11														
	正常群	0	87	1	0	85	3	0	88	0	2	84	2	4	84	0	1	84	0	1	87	0	1	87	0	0	75	13														
4. 期待型	問題群	1	11	0	0	12	0	0	12	0	1	11	0	0	12	0	0	12	0	0	12	0	0	12	0	0	8	4														
	正常群	1	115	3	0	114	5	0	119	0	2	115	2	6	113	0	1	113	0	1	118	0	1	118	0	0	99	20														
5. 干渉型	問題群	1	6	0	0	7	0	0	7	0	1	6	0	0	7	0	0	7	0	0	7	0	0	7	0	0	5	2														
	正常群	1	120	3	0	119	5	0	124	0	2	120	2	6	118	0	1	118	0	1	123	0	1	123	0	0	102	22														
6. 不安型	問題群	1	9*(+)	1	0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	11	0	0	8	3														
	正常群	1	117*(+)	2	0	115	5	0	120	0	3	115	2	6	114	0	1	114	0	1	119	0	1	119	0	0	99	21														
7. 溺愛型	問題群	1	36	2	0	38	1	0	39	0	1	36	2	0	39	0	1	39	0	1	38	0	1	38	0	0	32	7														
	正常群	1	90	1	0	88	4	0	92	0	2	90	0	6	86	0	0	86	0	0	92	0	0	92	0	0	75	17														
IV. 服従型	問題群	1	14*(+)	2	0	17	0	0	17	0	1	15	1	1	16	0	0	16	0	0	17	0	0	17	0	0	12	5														
	正常群	1	112*(+)	1	0	109	5	0	114	0	2	111	1	5	109	0	1	109	0	1	113	0	1	113	0	0	95	19														
V. 矛盾不一致型	問題群	1	20*(-)	2	0	22	1	0	23	0	2	20*(+)	1	0	23	0	0	23	0	0	23	0	0	23	0	0	17	6														
	正常群	1	106*(+)	1	0	104	4	0	108	0	1	106*(+)	1	6	102	0	1	102	0	1	107	0	1	107	0	0	90	18														
10. 不一致型	問題群	2	37*(-)	2	0	39	2	0	41	0	1	39	1	1	40	0	1	40	0	0	41	0	0	41	0	0	33	8														
	正常群	0	89*(+)	1	0	87	3	0	90	0	2	87	1	5	85	0	1	85	0	1	89	0	1	89	0	0	74	16														

*p<.05

関係診断テスト（児童・生徒用）」（品川・品川，1958）の第I部を用いた。また，フラストレーション反応の測定には，「P-F Study（青年用）日本版」（林・その他，1987）を用いた。主要な結果は，以下に示す通りである。

(1) 超自我因子においては，父親の養育態度と超自我因子との間に有意な関連は見られなかったが，母親の養育態度と超自我因子の間には有意な関連が認められた。すなわち，母親の養育態度が積極的拒否型であると，他者や自分をほどよく弁護する能力が低く，社会性や精神発達の未熟な反応と関連が高かった。また，不一致型や矛盾型は，社会適応に必要である自己保身のための適度な言い訳ができない反応と関連が高かった。

(2) 反応転移値においては，母親の養育態度が拒否型であると，欲求不満を起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応が次第に増え，とがめや非難が自分自身に向けられる自責・自己非難する反応の減少と関連が高かった。また，父親の養育態度が厳格型であると，欲求不満を起こしたことに對する失望とそれに伴う不満の表明に終始し，自己主張や責任の所在を追求するとか，問題解決にむかうことのできない反応の増加と関連が高かった。

引用文献

- 藤森立男・藤森和美 1992 青年期における両親の養育態度の認知とフラストレーション反応との関連 —その1. 女子青年におけるアグレッションの方向・型・反応について— 北海道教育大学紀要（第1部C）教育科学編 43, 397-407.
- 林 勝造その他 1987 P-Fスタディ解説—基本手引— 三京房
- Kawash, G.F., Keer, E.N., & Clewes, J.L. 1985 Self-esteem in children as a function of parental behavior. *Journal of Psychology*, 119, 235-242.
- 森下正康 1981 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達の研究 和歌山大学教育学部紀要（教育科学），30, 43-55.
- 品川不二郎 1964 親子関係 福村出版
- 品川不二郎・品川孝子 1958 田研式親子関係診断テストの手引 日本文化科学社
- Symonds, P.M. 1939 *The psychology of parent-child relationships*. Appleton Century Crofts.
- Vinack, W.E. 1968 *Foundation of psychology*, Van Nostrand.
- 湯田彰夫 1989 パーソナルコンピュータによる『P-Fスタディ解釈支援システム』*Information*, Jul. 109-116.

付 記

- (1) 「日本臨床心理士認定認定協会」の定める臨床心理士